

## 受動詞についての一考察

### ―自動詞におけるその位置づけを中心に―

孟 熙

キーワード：能動態、中相態、受動態、受動詞、使役主

#### 1. はじめに

「見つかる」、「捕まる」などの動詞はしばしば特殊な動詞とされる。このような動詞は他動化しても項の増加が見られず、さらに構文的にも意味的にも「- (ラ) レル」を用いた受動文と類似している。

- (1) a. 先生が家出した学生を見つけた。  
b. 家出した学生が先生に見つかった。  
c. 家出した学生が先生に見つけられた。
- (2) a. 警官が泥棒を捕まえた。  
b. 泥棒が警官に捕まった。  
c. 泥棒が警官に捕まえられた。

すなわち、「見つかる」「捕まる」などの動詞は「受身の意味を表すが、受身の形にならない」動詞と言ってもよいだろう。杉本(1991)ではこのような動詞を「受動詞」と呼んでいるが、本稿も杉本の名称を用いて考察を行う。

「見つかる」「捕まる」のような動詞について、影山(2000)では「例外的に動作主と思われる項が「～に」で具現される」特殊な動詞とされている。森田(1996)では、「語義そのものに受身的要素が含まれているため、ことさら受身文型を取らないが、意味的には受身そのものを成す」特殊な動詞とされている。また、杉本(1991)では主に受動詞の中の「見つかる」と「捕まる」を取り上げ、詳しく考察し、間接受動文との類似性から受動詞の性格を検討した。このように、受動詞について個別的な指摘がいろいろあるものの、受動詞をひとつの類として詳しく研究することはまだ少なく、さらに何故受動詞が特殊な性質を見せるのか、受動詞は動詞の中にどのように位置づけられるのかなど受動詞の本質まで探究した研究は管見の限りまだ少ない。そこで、本稿では今までの研究と異なる観点から受動詞の考察を試みる。中相動詞を手がかりとし、外力や使役主のプロセスへの関わり方という観点から、受動詞が何故特殊な性質を持っているのかについて検討する。結論としては、中相動詞は外力や使役主が事象のプロセスのどこまで関わっているかという基準により三分類ができ、受動詞は使役主が事象の最後まで関わる第三類と考える。さらに、使役

主が事象の最後まで関わらないと事象が成立しないため、受動詞はほかの自動詞と異なり、使役主である二格名詞句の出現が許容できるとして受動詞の特殊な性質について説明を与える。

## 2. 受動詞の特徴

通常の二格名詞句を取る自動詞の場合では他動化とは結合価がひとつ増加することであり、自動化とは結合価がひとつ減少することである。

- (3) a. 荷物が家に届いた。  
b. 宅急便屋さんが荷物を家に届けた。

ところが、例文 (1) (2) に示したように、「見つかる」「捕まる」のような動詞は他動化しても結合価の増加が見られない。むしろ他動詞文とその受身文の対応に似ている。この点から、杉本 (1991) ではこのような動詞を「受動詞」と呼んでいる。

杉本 (1991) が取り上げた受動詞は、有生物の二格名詞句をとる自動詞に限られており、語彙数も限られている。

- (4) a. 捕まる、見つかる、負ける、破れる  
b. 苦しむ、傷つく、驚く、喜ぶ  
(5) 授かる、言いつかる、ことづかる、教わる、借りる。

ところが、『日本語基本動詞用法辞典』と『日本語語彙大系』の二格を取る動詞語彙表から杉本 (1991) で挙げている条件、すなわち他動化しても項の増加が見られず、二格名詞句の存在が許される、という条件を満たす動詞を選び出すと、杉本 (1991) で挙げられていない動詞もあり、これらも本稿では受動詞と認める。

したがって、本研究で検討する受動詞は (6) (7) になる。(杉本 (1991) にない動詞に下線をつけた)

- (6) a. 捕まる、見つかる、負ける、敗れる、助かる、引き立つ  
b. 苦しむ、傷つく、驚く、喜ぶ、悲しむ、悩む、狂う、脅える、酔う  
(7) 預かる、授かる、教わる、言いつかる、ことづかる、借りる

(7) はヲ格名詞句を取るいわゆる「他動詞的受動詞」であり、(7) b は人間の感情に関する動詞のため、異なる性質を見せると考えられる。これらの動詞については別稿で考察することにし、本稿ではまず自動詞的受動詞 (6) a について考察する。

受動詞という名称のように、最も大きな構文的特徴としては、一般の自動詞は使役主を

表す二格名詞句を許さないのに、受動詞においては許容できる。しかし、杉本（1991）で指摘されているように、二格名詞句が出現すると意味に変化をもたらす。(8a) ではただ客観的に「家出した学生」が発見されたということを述べているだけであるが、b では学生の意に反するというニュアンスが出てくる。これについての詳しい分析は杉本を参照されたい。

- (8) a. 家出した学生が見つかった。  
b. 家出した学生が先生に見つかった。

### 3. 先行研究

本稿で考察する受動詞は構文上では使役主を表す二格名詞句が許容され、意味上では主語に立つものは二格名詞句で表す使役主から動作を受けることを表し、すなわち受動の意味を表す。「受身の意味を表すが、受身の形にならない」という受動詞の意味的特徴から、中相動詞と関連しているように思われる。

中相態というのはギリシア語や英語などに存在する能動と受動の中間の機能をもつ動詞の態とされている。(注1)

- (9) a. The submarine sank the battleship. (能動態)  
潜水艦は戦艦を沈めた。  
b. The battleship was sunk by the submarine. (受動態)  
戦艦は潜水艦によって沈められた。  
c. The battleship sank. (中相態)  
戦艦は沈んだ。

日本語文法の研究においては、ヴォイスとしての中相態が存在するかどうかという問題はともかく、動作・作用の結果としての状態の変化の意を表す中相動詞が存在すると主張する学者がいる。

#### 3.1 金田一（1957）

金田一（1957）では、ギリシア語に中相が存在しているのと同様に、日本語動詞の相にも、能動相と受動相と使役相、さらに中相が設けられると述べている。中相動詞の概念を

---

注1：現在では、「この本はよく売れる」のような文が中間構文と呼ばれることがあるが、本稿でいう「中相動詞」はこれとは異なる。

「受動的な意味をもった、受動相ならざる自動詞」と定義している。

『日本文法講座』の総論に触れたが、「……シタ結果ニナル」の意味をもつ動詞である。(中略)

日本語では、この中相の言い方が好まれ、動詞の中には「中相動詞」というべきものがたくさん存在する。

煮エル (=煮た状態になる)

売レル (=売った状態になる)

クズレル (=くずした状態になる)

キマル (=きめた状態になる) などがいずれもその例である。

もとの動詞が授与の意味を表す動詞の場合には、「に」格の語を主語とする特別の言い方が日本語には発達している。これも一種の中相動詞だという。

授カル (=授けた状態になる)

教ワル (=教えた状態になる)

アズカル (=あずけた状態になる)

これらは、「福ヲ授カル」「ピアノヲ教ワル」のように、「ヲ」格の補足語をとる——つまり中相動詞でありながら、一種の他動詞である点、注意される。(P223-245)

金田一では以上のように指摘している。そのほかに「助かる」「儲かる」「(腰)が据わる」「(木)が植わる」「固まる」「合わさる」「言い付かる」「もらう」も中相動詞に属すると述べている。

- (10) a. 煮える、売れる、崩れる、決まる、据わる、植わる、儲かる、固まる、合わさる  
b. 授かる、教わる、預かる、言い付かる、もらう

これらの動詞はいずれも結果を表す中相動詞であるとされているが、「受動的な意味をもった、受動相ならざる」という定義はあいまいであり、どのような共通の性質を持っているのかは検討されておらず、構文に関しても一切記述はされていない。また、一口に中相動詞と呼んでいても、何らかの異なる性質を有するよう感じられる。さらに、金田一では「見つかる」などの受動詞について一切言及していないが、金田一の定義から見ると、むしろ受動詞が最も典型的な中相動詞と言えらる。

本研究では日本語に中相動詞と呼ばれるべき動詞の一グループが設定できるという観点に従い、中相動詞の性質を具体的に検討し、分類も試みる。さらに、中相動詞の分類を手がかりとして、受動詞の性質について考察を試みる。

## 3.2 西尾 (1978)

金田一 (1957) では日本語にも中相が設けられると提起し、中相動詞の概念も提起したが、明瞭な規定はなされていない。金田一でいう中相動詞を観察すると、いずれも対応する他動詞を持っている自動詞であることが分かる。

西尾 (1978) では自動詞の考察から、

自動詞の中で、対立する他動詞を持つものにおいては、動詞の表す属性の主体において、ある状態の変化が成立するというタイプの意味を表すものが多い。(中略) これはインド・ヨーロッパ語で古く盛んだった中相態 (middle voice) のような言い方をする動詞として「中相動詞」というべきものだとも言われる。このような動詞は大体、直接の受身も迷惑の受身も構成しないので、三上章氏の分類によれば「所動詞」に属する性格を主とするものだと言えよう。

と述べている。すなわち、西尾 (1978) では金田一を参照し、対をなしている他動詞を持つ自動詞は中相動詞であると述べている。しかし、「有対自動詞＝中相動詞」という捉え方には疑義が残る。確かに、金田一で挙げられている中相動詞を見ると、いずれも有対自動詞であることが分かるが、果たして有対自動詞ならずべて中相動詞であるかはより詳しく検討する余地があると思われる。

## 4. 本研究で扱う中相動詞

### 4.1 中相動詞の範囲

早津 (1987) では中相動詞に関しては検討していないが、対応する他動詞を持つ自動詞の意味的特徴と統語的特徴について詳しく分析をし、意味による分類もしている。早津で挙げられている自動詞の分類を参考にし、その中の有対自動詞のみを取り上げ、分析を試みることにする。

- (11) a. 第一類、物や人の静的な状態や性質を表す有対自動詞  
見える、聞こえる、知れる
- b. 第二類、人の動作・行為・表情などを表す有対自動詞  
驚く、助かる
- c. 第三類、人の感情・精神的な状態などを表す有対自動詞  
苦しむ
- d. 第四類、天候・気象・時間の経過などを表す有対自動詞  
該当するものなし
- e. 第五類、人や動植物の自然な生育に関する事象や、状態に生じる自然な変化などを表す有対自動詞

育つ、覚める、癒える

- f. 第六類、物の属性や物理的な特性の一つが変化する事象を表す有対自動詞  
曲がる、壊れる、折れる、切れる、崩れる、砕ける、潰れる、破れる、割れる、裂ける、ちぎれる、縮まる、縮む、伸びる、広がる、固まる、煮える、焼ける、燃える、焦げる、沸く、覚める、冷える、暖まる、薄まる、荒れる、乱れる、ふさがる、整う、まとまる、かたづく、ちらかる、強まる、弱まる、高まる、乾く、濡れる、汚れる、染まる、直る、治る、締まる、緩む、溜る、儲かる、増える、増す、減る、残る、余る、開く、閉まる、傾く、倒れる、回る、揺れる。
- g. 第七類、物の移動すなわち物の存在場所が変化する事象を表す有対自動詞  
上がる、流れる、移る、落ちる、降りる、転がる、下がる、沈む、動く、進む、戻る、寄る
- h. 第八類、ある物に付着していた物がそこから取り除かれたり、ある場所に存在していたものがそこに存在しなくなったりする事象を表す有対自動詞  
はずれる、はがれる、はげる、離れる、ほどける、もげる、取れる、抜ける
- i. 第九類、物がある場所に存在あるいは接触するようになる事象を表す有対自動詞  
納まる、付く、埋まる、詰まる、掛かる、重なる、はさまる、並ぶ、かぶさる、備わる、はまる、浮かぶ、浸る、返る、入る、出る、加わる、混ざる、満ちる、刺さる、揃う、当たる、伝わる、届く、つながる、詰まる
- j. 抽象的な事柄や事態そのものの変化を表す自動詞、その存在に関わっている「人」の存在が感じられる。  
始まる、終わる、変わる、決まる、定まる、改まる、延びる、済む、止まる、続く、起こる、起きる、消える、滅ぶ、絶える、静まる、早まる

これらの自動詞を観察してみると、異なる性質を持っていることが分かる。これから早津で挙げられているこれらの自動詞を観察し、本研究で中相動詞と見なさないものをまず除外し、さらに性質を検討して分類を試みる。まず、早津の第一類の動詞を見ると、「見える、聞こえる、知れる」の三つは人の能力を表す可能動詞に近い状態動詞であるため、除外する。また、本稿で扱う中相動詞は動作・作用を受け、動作・作用の結果の意を表すため、文の主体がみずから意志を持って行為を制御し、みずから行為を行うことができると、使役主が現れず、含意もされなくなる。すなわち、意志動詞を除外しなければならない。意志動詞であれば、意志形の「～よう」や命令形と共起できるとされている。本稿では動詞の「～よう」形との共起可否を判定方法として用いる。「～よう」と共起できる動詞なら、本研究でいう中相動詞から除外される。

(12) 上ろう。

(13) 止まろう。

- (14) ?崩れよう。
- (15) \*煮えよう。
- (16) \*決まろう。
- (17) ?育とう。
- (18) \*見つかりよう。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」より実際の使用例をいくつか挙げる。

- (19) 葛西は車を降りようかどうか、迷っている風だった。(塚原幸『ガード』)
- (20) ここまでくれば、バカでも目が覚めようってものだが、何を考えたのか、自分一人で消火活動をしようと悪戦苦闘。(篠原哲夫『こんな国あってもいい』)
- (21) 計画重視は「イギリス人型」(歩きながら考える)が大事!段取りの勘ドコロを押さえて動こう。(吉原靖彦『仕事がどんどんうまくいく「段取り」の教科書』)
- (22) 国道からは標識に従って進もう。(丸々もお『東京夜景 BEST』)
- (23) いずれにしても、まず中央学校について述べ、次に専科学校に移ろう。(阪上孝『フランス革命期の公教育論』)
- (24) 容器として用いるのだから当然であろう。まず、鍋兼やかんの製作に入ろう。(柘植久慶『アウトドア・ナイフの使い方』)

したがって、本稿で扱う中相動詞は以下の条件を満たす動詞である：

- (25) a. 動作や作用の結果としての状態変化を表す自動詞；
- b. 動作や作用を受け、その結果を表すため、対応する他動詞を持つ有対自動詞；
- c. みずから動作を行うことのできない非意志動詞であり、主語に立つものは項構造から見ると内項である。

一見、「非対格動詞」と同様のように見えるが、確かに「割れる」や「崩れる」など統語的に内項が主語に立つ非対格動詞は、本稿でいう中相動詞と重なる部分がある。しかし、「死ぬ」や「泣く」など人間の非意志的な動作を表す自動詞や「できる」「ある」などの無対自動詞も非対格動詞とされている。これらの動詞は本研究でいう中相動詞としては認めない。また、金田一で「受動的な意味をもった、受動相ならざる」と一言で定義しているが、構文に関しても一切記述はないため、どこまで中相動詞と認めるかは不明である。本稿では(25)を満たす動詞を中相動詞と見なす。

## 4.2 中相動詞の分類

早津(1987)で挙げた自動詞から本稿で考察する中相動詞を抜き出し、観察すると違う性質を持っているように感じられる。そこで、本研究では「使役主や外力の存在する状況」

を手がかりとして用い、中相動詞を見てみる。

結論を先に述べると、中相動詞に属する動詞は以下で挙げる三種類に分けることができ、それぞれの使役主や外力の事象への関わり方が異なっており、さらに連続性を持つことが分かる。

第一類、使役主が関与可能であり、内発的に状態変化を果たす中相動詞：裂ける、崩れる類

第二類、内在的性質も関わるが、外部の使役主や外力の存在が必須であり、使役主や外力により性質の変化が実現する中相動詞。しかし、使役主や外力が背景化され、統語的には出現できない。煮える、掛かる類

第三類、内在的な性質ではなく、使役主や外力が必須であり、使役主や外力がないと、動作や変化が実現できない動詞。さらに第二類と異なるのは、使役主や外力は二格名詞句で出現できる。見つかる、捕まる、教わる類

具体的にそれぞれどのような動詞なのか見てみよう。

(26) 第一類、汚れる、癒える、壊れる、砕ける、潰れる、割れる、裂ける、ちぎれる、伸びる、燃える、冷める、冷える、荒れる、乱れる、倒れる、はずれる、はがれる、はげる、ほどける、もげる、取れる、抜ける、崩れる、満ちる、解ける、破れる、切れる、焼ける、折れる。

第二類、煮える、焦げる、沸く、濡れる、売れる、釣れる；かたづく、ちらかる、掛かる、植わる、埋まる、漬かる、備わる、当たる、伝わる、始まる、定まる、改まる、助かる、余る、直る（注2）

第三類、見つかる、捕まる、負ける、敗れる、引き立つ、預かる、授かる、教わる、言いつかる、ことづかる、借りる；苦しむ、傷つく、驚く、喜ぶ、悲しむ、悩む、狂う、脅える、酔う

第一類では使役主や外力が関与可能であるが、状態変化の実現は外在的なものによるのではなく、内在的な性質によるため、「おのずから」を第一類とそれ以外の類に分けるテストとして使用する。共起できるものを第一類とする。

(27) 帯はおのずから解けた。

(28) 垣根はおのずから崩れた。

(29) 髪の毛はおのずから抜けた。

(30) \*牛肉はおのずから煮えた。

(31) \*この本はおのずから売れた。

---

注2:「なおる」のような同音異義語においては、漢字表記を用いて区別し、異なる動詞として考察を行う。



(32) \*部屋はおのずから片付いた。

また、第二類と第三類を分けるテストは使役主や外力を表す二格名詞句を用い、共起できないものは第二類とし、共起できるものは第三類とした。

(33) \*牛肉は料理上手なお母さんにぐつぐつ煮えた。

(34) \*部屋は子供たちにきれいに片付いた。

(35) \*結婚式の日時はお父さんに決まった。

(36) 夫と姑の言動に自分が苦しんでいる。

(37) 密漁していた漁師は監視員に見つかった。

### 4.3 考察

前節で述べたように中相動詞と呼ばれるべき動詞の一グループがあり、さらにこれらの中相動詞を観察すると、中相動詞に属しても明らかに異なる性質を持つものがあることが分かる。そこで、本研究は使役主や外力の存在する状況により中相動詞を三種に分けた。本節では各種類の性質や文法的振る舞いを考察する。

#### 4.3.1 「裂ける、崩れる」類

第一類の「裂ける」、「崩れる」などの動詞を見ると、行為の存在を前提とせず、内発的に状態変化を進める性質を持っているように見えるため、影山（1996）ではこのような他動詞から自動詞への派生を「反使役化」として分析している。影山（1996）では以下のような語彙概念構造（LCS）で表示している。

(38) [x CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]  
→ [x=y CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]

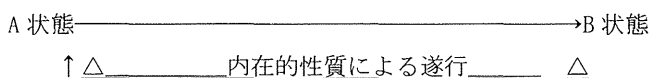
外項 (x) を内項 (y) と同一指示とするのは使役者を被使役者と同一物と見なし、その出来事が完全にその主体の内発性によるものとして捉えている。

ところが、ここで疑問となるのは、まず「切れる」などの動詞においてはその状態変化を果たすには本当に完全に「内発的コントロール」だけで実現できるのかということである。影山（1996）では副詞の「勝手に」と命令を表す「～てくれ」を使用し、「切れる」などの動詞は外的な作用によってではなく、それ自身の内在的動きだけで変化を果たしていると解釈しているが、筆者の考えでは、「切れる」などの動詞においては確かに内在的な性質を持っているが、しかし、内在的性質と内発的コントロールとは区別すべきものであると考える(注3)。例えば、「花瓶が割れた」を例にすると、確かに金属など割れることが生じないものに対し、花瓶やコップなどの物には物理的な性質によりひとつから複数に分か

れ離れ、ひびができて開いた状態になるという内在的性質を有する。しかし、花瓶が割れることは花瓶自身がコントロールして、制御できるものではなく、例えば激しい温度の差や風雨にさらされて風化してしまったなど外在的な何らかの作用が存在すると考えられる。そのため、性質の変化を実現させるためには完全に内在的性質だけに頼るのではなく、何らかの特定のできない作用も必要とされている。

次に、この類の動詞においては「自然にそうなった」という意味のほかに、意図的に「～した結果、そうなった」という意味を表す場合もある。「肌が焼けた」という文を例にすると、炎天下で活動したから意図していないのに肌が小麦色に焼けたという意味を表すほかに、わざわざ日焼けサロンに行って肌を焼いたら肌が焼けたという行為の結果の意としても解釈できる。影山の反使役化の操作はこのような場合にはあてはまりにくいと思われる。「切れる」や「折れる」においても、影山では反使役化の例として挙げているが、主語に立つものをもしそれぞれ「食パン」、「折り鶴」にするならば、もはや反使役化ではなくなる。すなわち、影山でいう反使役化という操作は主語の性質からも影響を受け、正確に言語現象を記述するためには、動詞だけからは決定できず、主語に立つ名詞の意味も考えなければならぬといっても良いだろう。

そこで、筆者は反使役化という観点からではなく、「割れる」など内在的性質を有する動詞については以下のように考える。これらの動詞において、ある状態変化を果たすためには、使役主の行為を必ず要求するとは限らないが、自然力にせよ、何らかの特定できない作用がその状態変化を起動した使役主となり、状態変化を起動するが、その主語に立つものは一旦起動されたら、内在的性質により変化を遂行し、最終的にその状態変化が実現される。図で示すと、以下のようなものである。(矢印↑は使役主や外力の作用を表す、三角△は内在的性質を表す)



【図1】第一類動詞における使役主・外力の関わり方

すなわち、「割れる」などの動詞において、A状態からB状態への変化が起きる時は、外在する動作・作用が変化を起動し、状態変化を起こしたが、その後の変化には手を加えなくても、そのものの内在的性質により、状態変化が遂行される。

また、この類の動詞の自他対応の形態的な面から見ると、「-e-」の接辞が付いていることが分かる。須賀(2000)では「-e-」の機能は「割れる」などの動詞の自他対応において

---

注3：内発的コントロールについて、影山(1996)では明確な定義をしていないが、一切外からの働きかけによらずに、完全に内部から事態を起こすことと考えられる。

内在的性質については本稿では主体に立つものの内的に持つ物理的な性質であると定義する。

は、使役的働きかけをする主体を潜在化することにあると述べている。筆者も須賀（2000）に賛成し、さらにその潜在化する理由としては、使役主の特定不可能性があると考えられる。

#### 4.3.2 「煮える、決まる」類

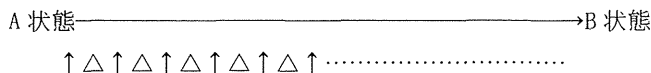
「煮える」「決まる」類を見してみる。この類においては、状態変化の実現は必ず使役主の行為が前提となると考えられる。すなわち、あるものが「煮える」状態になる、またあるものが「決まる」状態になるためには、その主体はみずから煮える、決まる状態を成し遂げる内在的性質を持たず、必ず使役主が「煮る」や「決める」行為を行い、その結果として「煮え」たり「決まっ」た状態となる。このような動詞においては、行為が背景に存在する。影山（1996）の説明では、これは脱使役化である。

$$\begin{array}{ccc}
 (39) & & [x \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME } [y \text{ BE AT-}z]]] \\
 & & \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \\
 \text{(統語構造での現れ)} & \varnothing & \text{内項}
 \end{array}$$

影山（1996）の記述では、脱使役化は使役構造の LCS において、使役主を不特定の人物（ $\varnothing$ ）として語彙的に抑制する。その使役主は意味的に含意されても統語構造には顕現しないと述べている。さらに、影山（1996）は脱使役化では「-ar-」の接辞、反使役化では「-e-」の接辞が自他交替に参加すると述べ、「日本語の-e-自動詞も、状態変化の達成が自らの性質に依るようなものだけに当てはまる」、「はっきりとした使役主を要求するような動詞は-e-自動詞にならない」と述べている一方、「煮える」のような明らかに使役主を要求する動詞については「みずから然る反使役化」としている。

本稿の第二類の動詞はいずれもみずから状態変化を司ることができず、必ず使役主が背景にあり、影山の脱使役・反使役の観点から見れば、脱使役化による操作のはずである。ただ、形態的には「-e-」と「-ar-」の二種が存在する。影山（1996）では「-ar-」の働きは脱使役化により動作主を背景化することとしているが、本研究では、中相動詞における「-e-」も「-ar-」も使役行為や作用を背景化する働きを持っているとする。但し、第三類の動詞はまた異なる性質を見せるが、それは次節で詳しく検討する。

ここで、第二類の動詞においても図で示してみる。



【図 2】第二類動詞における使役主・外力の関わり方

前節の「裂ける」、「崩れる」類と異なる点としては、「裂ける」、「崩れる」類においては、使役的働きかけをする主体は特定できず、状態変化を起動したのは外在的な使役主である

が、状態変化の遂行は内在的性質に頼っている。それに対し、「煮える」「決まる」類においては内在的性質が関わるが、それによる状態変化の遂行はできず、働きかけをする主体は必ず背景に存在し、さらに事象の起動した者であると同時に、状態変化の実現を成し遂げる使役主でもある。しかし、使役主は事象プロセスのどこまで働くかは実際の文脈などにより揺れが生じる。

#### 4.3.3 「見つかる」類

「崩れる」「裂ける」類と「煮える」「掛かる」類について考察を行ったが、本節ではいわゆる特殊な性質を有する「見つかる」類について考察を試みる。

「見つかる」類の動詞には「-ar-」接辞も「-e-」接辞もある。前節で「-ar-」も「-e-」も使役行為や作用を背景化する働きをすると述べたが、「見つかる」類においては背景化とは言えなくなる。すなわち、「割れる」「煮える」類では使役主は背景に存在しているにもかかわらず、統語的には出現できない。それに対し、「見つかる」類は統語的に出現しなくても勿論自然な文であるが、出現しても許容される。それは何故だろう。その理由を探るために、本稿ではアスペクトのテイル形を用いて「見つかる」類は「割れる」「煮える」類とは異なる性質を持っていることを検討する。

本研究で考察する中相動詞は、いずれも対応する他動詞の表す動作・作用の結果としての状態変化という意味を表す。これはこのような動詞が中相動詞と呼ばれるべき理由である。「割れる」は「割る」という使役主の行為または自然界の特定できない作用がもたらした結果であり、「煮える」は使役主が「煮る」という動作を行った結果であり、また「見つかる」も使役主が「見つける」という動作を行った結果である。これらの中相動詞をテイル形にすると、以下ようになる。

- (40) 携帯電話の液晶が割れている。
- (41) ダンボールが潰れている。
- (42) うどんが煮えている。
- (43) のれんが掛かっている。
- (44) 放射性物質が見つかっている。
- (45) 犯人が捕まっている。

つまり、テイル形にすると、いずれも動作の継続という意味にはならず、結果の継続という意味を表している。この点については中相動詞の定義から考えると当然のことである。ところが、その対応する他動詞をテイル形にすると、異なりが現れる。(46) - (49) はいずれも動作が継続している解釈となるが、(50) と (51) は結果の継続の意味しか読み取れない。

- (46) 風船を割っている。
- (47) ダンボールを潰している。
- (48) 豆を煮ている。
- (49) ドアにのれんを掛けている。
- (50) 財布を見つけている。
- (51) 犯人を捕まえている。

さらに、その差異をよりあきらかにするために、「片手で」や「時間をかけて」など動作の継続という意を表す道具格や副詞句を加えると、以下のようになる。

- (46´) 大量の風船を針で割っている。
- (47´) 足でダンボールを潰している。
- (48´) 3時間もかけて豆を煮ている。
- (49´) 片手でドアにのれんを掛けている。
- (50´) \*一時間もかけて財布を見つけている。
- (51´) \*一ヶ月間もかけて犯人を捕まえている。

例文(50´)では「見つけている」を「捜している」に、(51´)では「捕まえている」を「捜索している」とすると、自然な文になる。

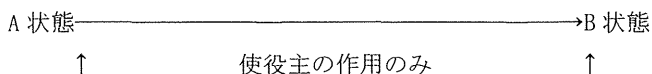
- (52) 一時間もかけて財布を捜している。
- (53) 一ヶ月間もかけて犯人を捜索している。

これらの例文の中では「見つける」がほかの動詞と異なる性質を持っていることを示唆する。「割る」や「煮る」、「掛ける」のテイル形は動作の継続を表せるのに対し、「見つける」は動作の継続を表すことができない。ここで、工藤(1995)で動詞を「主体動作動詞」、「主体動作・客体変化動詞」、「主体変化動詞」に分けたのとヴェンドラーの動詞四分類などの先行研究の分類を用い、「割る」「煮る」「掛ける」及び「見つける」「捕まえる」を観察すると、「割る」「潰す」「煮る」「掛ける」は動作行為を表す動詞であるのに対し、「見つける」は到達の一瞬を表す動詞であると思われる。すなわち、「煮る」「割る」「掛ける」などの動詞はそれぞれ被使役主にある状態変化をもたらすためには、「力を加え固体の物をいくつかに分けて離す」、「力を加えてもとの形を崩す」、「水などの中に食物を入れ、火にかけて熱を通す」、「高いところからぶらさげる」のような行為を行い、動詞の意味には行為の始まる時点から一連の過程も含まれる。それに対し、「見つける」「捕まえる」は、到達の一瞬を表し、無論「見つかる」や「捕まる」という状態変化を実現するためには、「捜す」行為をしたり、「捕まえる」行為をしたりするが、実現されるまでの過程は重要視されず、

結果のみが注目され、実現した時点にその動詞の表す事態が成立する。そのため、使役主の働きかける過程などが視野に入っていないが、実現された最後の瞬間にその結果を実現させた使役主は必ずそこに存在している。言い換えれば、使役主の働きかける過程は視野に入っていないが、使役主は最初から最後までずっと働き、最後によりやく状態変化の実現を遂行したと言えるだろう。ほかの受動詞と対応する他動詞も同じ性質を持っている。ここでも動作継続の意が読み取りやすいように、「一時間をかけて」や「真っ最中」、「～ているところ」など動作の継続を表すことばを文中に入れた。いずれも不自然な文になる。

- (54) \*今は世界記録をやぶっている真っ最中です。
- (55) \*一時間をかけて相手チームを負かしている。
- (56) \*二時間をかけて井戸に落ちた子どもを助けている。
- (57) \*今主役を引き立てているところです。

また、前節で述べたように、「見つかる」などの受動詞においては、主語に立つものは内在的性質を持っておらず、みずから状態変化を実現できる力もなく、完全に使役主や外力に頼っている。対応する他動詞の性質からも影響を受け、使役主は過程のスタートする時点から終わる時点の全過程の中に存在しており、変化が実現される時まで働いている。その結果、「煮える」「割れる」「掛かる」の文においては使役行為が意味的に含意されても統語的には顕現できないのに対し、「見つかる」においては使役行為の出現が許容できる。



【図3】第三類動詞における使役主・外力の関わり方

## 5. まとめと今後の課題

本研究はいわゆる「受動詞」がほかの自動詞と異なる構文的特徴を持ちうる理由について探るため、中相動詞におけるその位置づけを手がかりに考察を行った。考察した結果、中相動詞と呼ばれるべき動詞の一グループを設定し、受動詞の性質を考察するために、使役主と外力の事象への関わり方により、中相動詞を「割れる」類、「煮える」類、「見つかる」類の三種類に分けた。先行研究では、形態から反使役化と脱使役化操作で他対応を解釈しているが、一致しない部分も多く存在する。そこで、本研究では脱使役・反使役の区別ではなく、外在的行為・作用が状態変化プロセスのどこまで関わるかという観点から中相動詞を見た。すなわち、「割れる」類では使役主や外力が特定できないが、状態変化の起きる際に働きかけ、状態変化の実現は内在的性質に頼る。「煮える」類では内在的性質も関わるが、使役主や外力が必須であり、事象変化プロセスの途中のどこかで働きかける。そして、「見つかる」などの受動詞では、内在的性質は持っておらず、状態変化は完全に使

役主や外力に頼っており、使役主や外力はプロセスが完成するまで働き続ける。

受動詞が二格名詞句を許容できる理由について考察を行ったが、受動詞がその主語に立つものの有生性と無生性により、二格名詞句の許容度が変化するなど異なる文法的振る舞いを見せる理由は何だろうか。また、二格名詞句が出現すると、主体の意に反するニュアンスが出る理由は何だろうか。さらに、感情に関する受動詞や他受動詞についても考察できなかった。これらの問題を今後の課題とする。

#### 【参考文献】

- 金田一春彦(1950=1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房  
----- (1957)「時・態・相および法」『日本文法講座Ⅰ総論』 明治書院  
鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』 むぎ書房  
西尾寅弥(1978)「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国語と国文学』55巻5号  
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版  
早津恵美子(1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』7 京都大学  
杉本武(1991)「二格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版  
影山太郎(1996)『動詞意味論』 くろしお出版  
----- (2000)「自他交替の意味的メカニズム」『日英語の自他交替』ひつじ書房  
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房  
森田良行(1996)『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房  
須賀一好(2000)「日本語動詞の自他対応における意味と形態との相関」『日英語の自他の交替』ひつじ書房